

小児の頸椎疾患

座長：松 本 守 雄・山 崎 正 志

本パネルディスカッションでは小児の頸椎疾患に関して 5 人の演者に発表および討議を頂いた。小児の頸椎疾患は比較的稀ではあるが、環軸関節回旋位固定やダウン症における上位頸椎病変は斜頸の遺残や脊髄障害など重篤な問題を生じる場合があることが知られている。

松永(今給黎総合病院)は CT の評価により小児ダウン症患者においては健常小児と比較して環椎レベルでの脊柱管が有意に小さく、上位頸椎不安定性がある患者では脊髄症状の発生するリスクが高いことを示した。藤由ら(千葉大学)はダウン症患者の上位頸椎手術例の造影 CT の分析から、ダウン症患者では椎骨動脈の骨外走行異常を高頻度に認めることを示し、これらの患者では術野の展開やスクリューの刺入時に注意を要すると指摘した。宇野ら(神戸医療センター)は脊髄症状を呈した環軸関節不安定症 16 例の手術成績を分析し、四肢痙性麻痺を呈した症例では成績が不良であったことから、高度な環軸椎不安定例では症状の有無にかかわらず積極的に手術を行うべきであると述べた。石井ら(慶應義塾大学)は陳旧性環軸関節回旋位固定患者の CT 所見から、軸椎の椎間関節の変形を指標とした保存療法の有用性について報告した。また、池上ら(村山医療センター)は小児に対する Magerl 法の手術成績を報告し、同法は小児環軸関節病変において良好な固定性と骨癒合が得られる優れた方法であることを示した。

小児頸椎病変の中でも特に頻度の高い上位頸椎病変は極めて重要な問題であるにもかかわらず、その病態や治療法などについての詳細な議論はこれまであまり行われてこなかった。本パネルディスカッションを通じてこれらの点についての有意義な知見が明らかにされたと言える。

(文責：松本守雄)